

扶桑國
第一産
養蠶秘録

上

庫	文	和
八三函	一六八八六	書
七架	三册	類

内閣文庫	
番號	和 16886
册數	3 (1)
函號	183 319



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

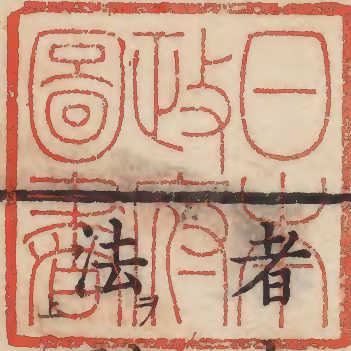


© Kodak, 2007 TM: Kodak



養蠶秘錄序

五畝之宅樹之以桑者古先聖王所以安養斯民之制也夫桑蠶之有益于民其功固大故自古至今殖養之于者充多矣然不精知所以殖養之之法則不能為其用也吾國養父郡藏垣村之里正上垣守國有慨乎此以奧



易之蠶甲^{タル}於諸國向者不遠千里而往淹留多日察其水土之宜學其殖粮之法而歸鄉以氣多郡納屋村之水濱與奥州之壤地相似^ス構^メ居於其地以其所學之法殖桑養蠶共能繁殖因造蠶種以販于國中^ニ人皆以為良種也於是和漢桑蠶之權輿及其

殖養之法見諸書者所親聞見者編彙輯錄以為三卷名曰養蠶秘錄欲以公于世使眾人精知其法也示予需序余見而喜四方之國養蠶之地人雖已知其法苟曰此書而極其工之蜜則可益無疎漏未養蠶之地人雖未知其法苟亦因此書而求其工

之法則可能成調理可謂兩得焉然
則絹繒綿絲之廣適于世用豈不多
於前日乎亦助王政流澤之一端也
頃日刺成為書卷首以還之云

享和二壬戌年孟春

出石文學櫻井篤忠識



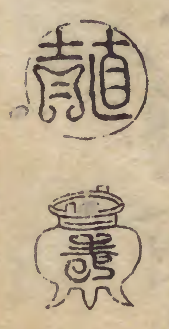
養序ノ貳

凡例

一此書之裁多采香原故事等之和漢史冊
擬輯録予懐身を加ふあふ中若遠
學阿是之訂多本朝香神傳記之神代の
卷を證し且神道者流の傳説不傳の記を亦
香原法の多手法回歴し其拙を致す不口授を
需めぬが採み不利を除き宜か来日婦女
尺易かん為画圖之類を卷中図説の童蒙の

不^カ論^コ又^カ蚕^コの字^カ音^カ悉^カふ^カと^カ蛇^カの俗^カ用^カひ^カ
 登^カの字^カと^カの^カ也^カと^カ誤^カり^カ用^カを^カ流^カし^カ誤^カる^カ
 俗^カの^カ也^カ皆^カ法^カに^カ依^カり^カ得^カる^カを^カ演^カじ^カ安^カん^カら^カめ^カ
 高^カ雅^カを^カ要^カす^カる^カに^カ至^カる^カ業^カ此^カ書^カ不^カ持^カる^カが^カ家^カの^カ典^カの^カ
 益^カあ^カん^カを^カ覽^カ者^カ杜^カ撰^カを^カ晒^カす^カふ^カと^カし^カる^カ也^カ

享味千成秋八月 但州大屋 上垣守國識



養蠶九例

養蠶秘録上卷 目錄

- 日本蠶始^ル事
- 中華蠶始^ル事 附^ル晋揚泉蠶賦之解
- 蚕^ノ異名^并蚕數品^{あり}事
- 天竺霖異大王^レ事 附^ル蚕居起異名之事
- 蚕連見^ノ様^ノ事
- 日毒忌^レ事 希^ル彫^ノ事
- 日寒水^レ漬^ノ事
- 桑^ノ植^ノ事
- 桑^ノと^レ地^ニて^レ益^{あり}事



天地乃
 ひろき神の
 みこめり
 ちとせの林々
 こころ乃まよめ

桑接木仕指の半

日取本仕指の半

日興送り此半 糸の病除ふ半

烟蚕法道具乃図解

蚕小沖のきくうぶ半

蚕連糸蚕小崩の用公きき半 附リ 崩と防ぐ半

蚕毒忌の半

甚蚕家造り仕指糸を交る思乃半

龍雷神人幸人秘訣云

神教が神を織殿へも不淨は申すと甚忌婦小なり
保食神の古跡を日向の國老より元來五穀は靈神
神食津小海一ませば何國小も育らん其柄焉と傳ふ
但馬國小鎮座ありぬ養父大明神なり初め水石初光
養父寄つ所小垂跡一の農器を製一の所を決
とつ新墾の所或土平とつ今と土田八本の出来一亦を
米地とつ蚕此絲をとつせ給ふ海を糸井の郷といふは神
の頂上に牛馬生れりといひ此亦也但馬と日本其一の
牛を養ふ所なり又此社を善養の神神形果とて
國中の民絲綿を初穂中して持ち祈禱ならん志
宜なり又廣希此小石を戴さ給りて蚕の傍小並て嵐

養食上ノ二

狐除守權といは是を猫石といふは神神最初降臨
地と大養父を號し三月在せし新成三月野といふ
神去給ふ所を大塚といふ也

因云は神神と狼狐使令とつ給ふ也小猿麻也く他物或は以時社
強く他守の津垂と信陽り田畑の例も立並は狼ありて守るは猿麻也
相成ありて其半條と垂を仰一納まは狼も立去給り又糸結の言
狼を以て給ふんとて給ふ其人の後小はと係ある半ありて又の初なる
以て農業と守り世給ふ靈物也又日那建聖堂とつ所も在は神
大明神といふ天竺人神なり其末社小天村君社澳津彦令澳津彦令ありけ
神と煮焼神教の小神神は是は亦も宜なり又丹波國より此里と給め
大神又津垂の地也丹波但馬とも一玉之後世に玉は民養業以て
猶と織て産物とて又丹波と大系社を併拜冊とて之も亦も養蚕の神なり
人多く給て小石と戴き嵐除石といふ古た亦「大系」下向の給抱い
舊事本記云 天孫棟令の姉市千魂姫令以て天養媛と定先
天豊國狐冥糸とつて蚕狐飼いむと云



人皇^{ひとみかど} 北^{きた} 二^{ふた} 代^{しろ} 雄^{ゆう} 略^{りやく} 天^{てん} 皇^{こう} の 后^{きさき} 素^す と 能^{のう} りて 蚕^{いと} と 書^か ひ 日本^{にっぽん} 紀^き 小^こ 足^{あし} 方^{かた}



陽春成色一室寂
 なく精力を流るる
 朽へあり
 古比賢王惠み成る世
 たるは民の寿を割る
 妃みけり桑と採る書
 の道と婦人此業を
 務めり貴人御身は
 かくせよあまの現
 の者をやりのも
 せむは有るる



人皇三十二代用明天皇
 清寧に聖徳太子弟操の政
 成輔市民を憐み書蚕此
 術を教へ給ひ半回車
 中記不見へり
 太子曰蚕と書や父母の
 赤子成育はあがま
 蚕を思ふ事我子とる
 ぞせよ暖陽氣の加減
 平生我身分不傲ひて温
 らる冷かりに平和なる根

附一あれい
 氏の手
 りの
 めえん
 あん
 天や
 くらん
 副長朝臣

中華蠶始之礼

中華にちゅうわくち伏犧ふくせい氏の時始ときく蚕ま此こ絲いとをたんとや又淮南王わいなんの蠶ま経まりて黃帝わうてい乃すなはち元妃げんひ西陵氏せいりやうし子こはたりて桑くわ或ある採とりて飼こ蚕まとり
好このよりて成なりし也

禮記月令云

是月也命野虞やよ母はは伐た桑くわ柘た鳴な鳩こ拂は其その羽う戴た
勝か降くだ于を桑くわ具ぐ曲ま植た籩ひん后ご妃ひ齊せい戒かい親か東とう鄉きやう
躬こ桑くわ禁か婦ふ女にょ母はは觀かん省しやう婦ふ使し以もつ勸か蠶ま事じ既すで登のぼ
分わ蘭らん種しゆ絲いと效かう功こう以もつ共こ郊きやう廟びやう之の服ふく母はは有あ敢た惰た
は章しやうは三月さんげつふたれば野虞やよ也なり山林さんりん田でん畑へつをたんと奉ほう行かう
小こ作させし桑くわ柘たをた伐たりして成な制せいせし桑くわ柘たなり又施せ乃すなはち

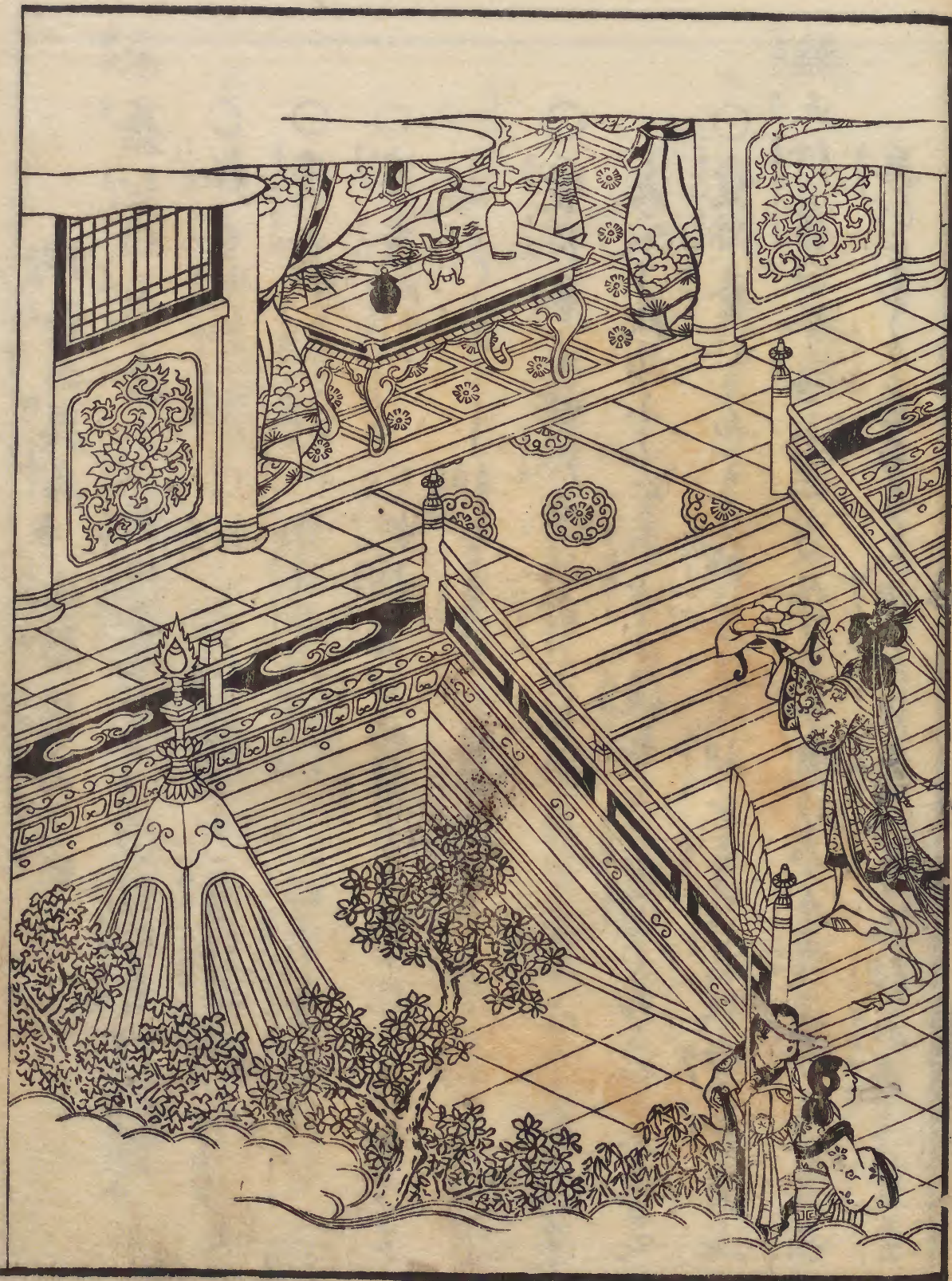
養蚕上ノ五

翼つばさをう門かど時とき言ことふたむたむた蚕ま此こ如ごと新あらた小こ祝いのちちかしし一いつ節せつ戴た勝かとりふ
名な俗ぞく小こ業ごういをぐれ中なかつのふはな此こ羽うのしりしたら思おもふが
おとりし其その名な桑くわのう樹き小こ宿やどはは早はやく蚕となむと新あらた志し柘た
あらひと松しょう蓋がい薦せん菜さいたたりしては他たくふ用もちふせしや
いは半はんなりを治ちふしみむはは天子てんし此こ后ごとり
潔けつ齊せいししみみづく桑くわ或ある採とりて蚕ま或ある飼こせしみよかり又
春はる蚕まのあ間まはは婦ふ女にょを禁しめ先ま耕かうひを治ちふしては停と止とせ
らら他た其その餘よ平へい生せい婦ふ人にんのまとりては業ごうままでとくくをこれを
をたぬとては拔ひたらぬしらぬ蘭らん小こ好この色いろはは絲いとをこじめ
をのく共いさりし成な效かうへし他たくふ業ごうとりぬしるなり
勤きんしし好このよりなり

去里又歸して温るし蚕室を催し蚕此生終て成ゆら時乳
は東方に志門を果葉成掃く勢其用言と如くしむゆ
眠里前と葉さびくく又起る時とゆくし成ゆらひ蚕
蟄くし見ゆ家其形作く時と就の雲井を尋む小若し
伏を時と虎此跡ふ小似し身を園しして秋と成ゆら葉
朝日成受まはさるらゆら登天の勢ひをなれ又葉にかけん
やまゆ時と葉や葉をのりく席を作し温打内蚕室小
入是夕日此陽字成ゆせ成既不盡く繭や成終を蚕種
清海を指す家内は更なり近路の者まてもうらまを
葉にとれを蚕室ふと風をへまゆとかいし又蚕母を
ちどめく蟄成終ひ成糞なりと又はゆかしくかふと

美原上ノ七

ちらさうそ積く此器小入是かの本や葉小成れし
流ゆをちけをけけりしは氣まや何のまづひ
もなくみおくうたひまらひ息をてしおむ事
にあん又け月小帝皇大年せりし徳を成終ひ
寝廟せりして御先祖此御廟小繭成終しと出
しちひ其後縁とそしせたりし又后妃も三玉や
しふれを獲ふ縁とくりたまひしす夫人世婦なりと
しふ教多すの宮女達もかしへしとあま歩たまし
まふり下流くし民々の婦女もしりて終まで農事此職
小蚕成終ひ織造の事業として老るるその身を夜
知を奪るは備ふけ道ふよれをたり



寢廟
繭
献
子
圖



養上八

神蚕の異名并蚕教種ある事

永嘉記曰永嘉小八種の蚕あり ○杭珠蚕 是は三月小

○柘蚕 四月初小 ○杭蚕 四月初小 ○愛珠蚕 五月小

○寒蚕 七月末小 ○四出蚕 九月初小

○寒蚕 十月小 ○杭珠蚕 三月小 ○早一卵を産む七日小

○愛珠蚕 杭珠蚕此卵と紙小産せ器小入是上を紙を

入しぬ柘小く水中小漬蚕と蚕速く出さず小

○愛珠蚕此卵と紙小産せ器小入是上を紙を

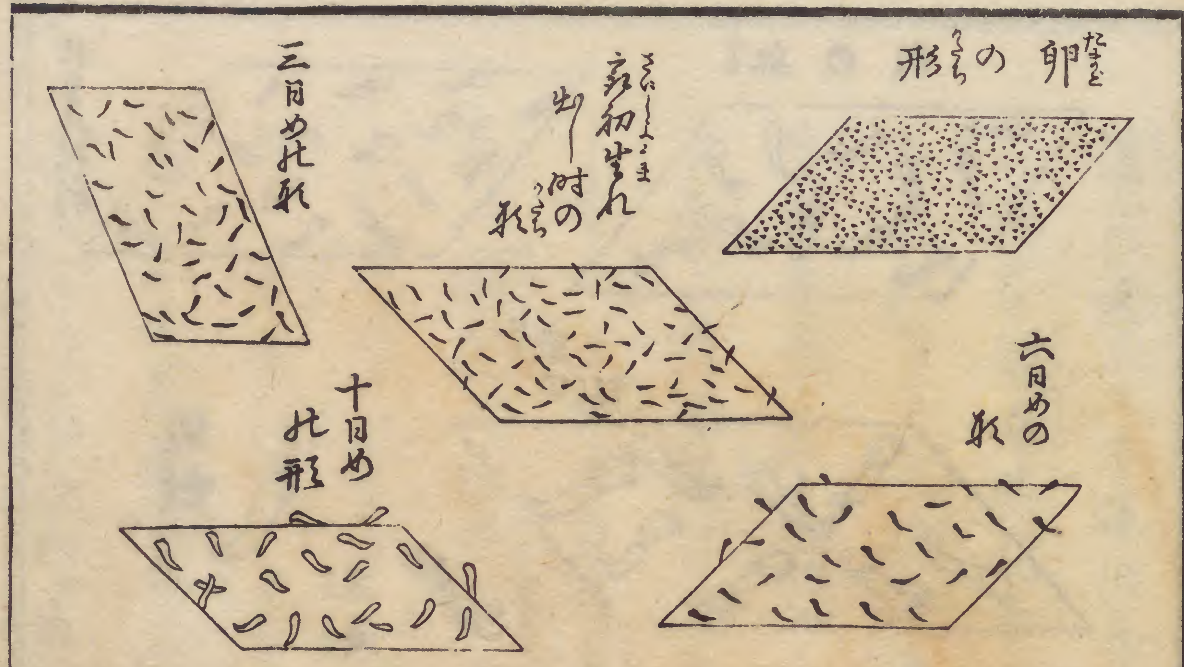
入しぬ柘小く水中小漬蚕と蚕速く出さず小

雜五行書曰今世小三度俯一一度生ずる蚕あり又二度俯

再び生ずる蚕あり又頂白丸蚕仰り又頰石蚕 楚蚕

養蚕上ノ九

卵の形



黒蚕 灰児蚕 秋母蚕 秋中蚕

老秋児蚕 秋末老獅蚕 綿児蚕

此數品あり凡蚕小大小の異品

有り大の蚕と荆素魯素に

書し小此蚕ハ厚と和素にて書し

若得く小の蚕小荆素成あり

腹と破る此患あり也

杜陽編曰永嘉中此彌懼國碧金

絲と眞を其國小素あり枝と

ころりて地を腐くして大素八十條

丈小なるもの丈六丈其枝小蚕あり

此月此形



昔四寸斗其色金也より絲と碧
 色小して其色金は是尺斗これを
 実ば是を尺斗を延るとり
 和漢三才圖會曰中華陰山峨眉
 の二山と雷棲ぐ歴世消は其中
 小蚕あり雷蚕也より大蚕の如し
 又水蚕あり負鳩山小生は長寸斗
 斗是色小して鱗角あり霜雪は
 度小耐小蘭を居る長寸六寸斗
 五色の絲を生はは絲より織る
 此綿は文綿とよみ不入る

養蚕上ノ十一

濡は火小入て燒は糸の絲かりむり
 堯帝此時海人
 此種を献む其地合からく暖小して和らなりこれも雪
 蚕は数あり又石蚕あり山川の水中に育て石小つれて
 生はま由多く居る釵股の如し長寸寸斗其身
 と度小其色泥れやく小して蚕其中小あり春夏羽生
 して小は蛾となりあ上は飛鳥又海蚕あり南海の
 岩に回小生は形梅指の如く其沙白粉の如し真なる
 その成得る一又胎生とて蚕小く生るその如り
 母也老を同く蓋し神蚕なり又曰原蚕と晚蚕
 中ら小又夏蚕とら小或は魏蚕熟蚕といふ是皆夏蚕の
 異名なり是を武養は蚕小く再び繭と作る周禮小

繭の図
蛾の図



原蚕と禁むるの夏蚕と何へ二子
小桑葉法二皮採る由へ二皮め此
芽ざらなり桑採たれよとみ
採むるふよ分て夏蚕と採むると
今中形小桑の所の白繭
蚕に夜眠るに夜起ると日救
九三十七八日より十日解あり
まよと流るふ蚕此項小園字のい
の字有り又玉濁色此蚕あり又
黄かりまよと此の蚕有りこれと
さんこまよと又行夏といふ白丸

養蚕上ノ十二

春蚕あり三十日解ありて繭
作り是はまよ此皮薄く緑も
よりの十日解ありて蛾生れ
是夏蚕の親なりはまよめて
蛾を出し夏蚕此種を取
又夏蚕あり種を出せたる
のま行夏といふ白蚕此種物
九繭小長短九角尖端此形有
蚕まよと分て日救十七八日ありて
朝の時に小蛾出雄と雌と
俯して静かり是と採分て交合



蛾の雌雄を
採分る
図

夫姑瓜助けそのと此妙不送り居下に命に津殿乃
 庭を深く堀く唯を埋光殺さむ其後土中より光明赫やん
 けるとあやしみ大王堀りせんのふに彼姫とて急なくおろしつゝ又
 素の本れろやねふ素せ滄海一流に流し移り物ふけぬ日本常陸玉
 豊良湊一流寄ふ浦人お程を妖術分抱しけり不幾程もなく彼姫
 せしくなむせ移ひ其靈魂化して番や成事とてやけぬ番初め
 兵記を獅子の兵記と云二度め此兵記成應る此兵記二度めと此の兵記
 二度めと庭此兵記と云ふと彼姫天皇ありは夜の難不遇のひし事と
 かごとりてかくる名は事し事しとぞ

替舞種子見振の事

種子と庭分掘りく面一版ありてし氣強く卵の中おしけり種
 の



地合能き多り蛾のもつり種子の
 ちしし能く悪き身ひなく取
 不粒落ど紙不能取付しと云ふと
 志ふべし粒を雨不蛾を推分悪
 様となくと名付て振出し一様は
 上中下や仕分なり粒蝶の粒は
 多きなり赤と地此素はく素は
 粒がく赤と地又赤と地素
 みる何し時と種がく是とぞ

種子見振の事

其土地の素喰へ蚕は種を播種をよして種ふ少お少りしてよく
種む種乃もふふのやげ何國をて地面宜し凡川筋北場所上素成
作て或は刈素又いのれ素などにて一畑方北法をりのく書い蚕
の上箇あく物へ蜂成種をさう種をさうて凡其次の種を場脇
切又さうり種或さう種なうて種これ其名何又織の性魚一はさく
とふふ麦版の色小似ふるとして名は布や性これ織を白と飯
のてり中り種玉あくよとすもと取んと思ひ才一種子は若魚成
吟味をさうり中白の中小蚕二ツも一折小籠り一たまあ
是と糸にさう耐いゆ一多く物本結を要一よて是と降くさう
ふさるはたまあく取一種子固くさう物て影一は種子と求め
一人を望年蚕不採に一と上作さうとあなくたまあく物あ
一葉上十四

是とぞ種も又さう種もとりよとれ其名あつ種を才一其年上く素
と喰上上種れ蚕少く取一種物と重初一少とて何方小手扱ある又い
素の食い小過不足ある或は種元魚さう又其家に不たあるは及の居起
に格別の定果小南る凡風及此時若小種れまも形をばおの事ツあても降
有さ其種蚕変て宜う凡陸分種元吟味して上種を求む一蚕成今
は種とさう凡蚕の若魚と年此無り我運さうて種を人さう是と成ひつと
なり蚕小種は生あるそのを種又さう一切の草木とて皆親小似るその之種は
樹の種と種て耳は樹とけさうか一又年此無りあうて種を求むお魚の
蚕と取ふ人も有はれども是と其年の色りにく種あくさお魚乃作と
まねを況や上種と求て何下一段格別の上作さうて種を求む其見分がたの
はは種さう一は及の居起ゆ素責素さう此種もさう種を求む

桑子植木の事

何玉にくも蚕と高んと思ひ先桑と作ると半肝要なり桑は木の葉
 ちさくして多く能く能く桑の面も光澤ありて木の葉は白く生え能く桑の
 葉は中華にて魯桑と云ふ又葉かく桑に股有て子と云くじも桑
 を荆桑と云ふ一農業全書に云く又一説小桑と云ふ桑と續ひく
 其桑葉に似く桑大なる桑の葉は小桑と云ふ桑と一説あり
 別物なり山中小育るは桑也別もの非ざるべし又園に種く桑の葉は
 中国より魯桑以真桑と云ふ葉は荆桑と云ふ桑の葉は似たりと云
 桑もつゝ又東國より新田にせかき田に種く桑も名く此桑名あり又桑
 此桑と種小桑とて桑の桑より出本ものなりよ魯桑と云ふは法
 と能く桑と見定る月中の桑葉の葉は能く能く桑と種く種小桑と種く

桑の葉上りて

木はか生る桑一末生と種小
 取て種の変態と云ふ切種く
 心中と種小取一実の種先
 桑葉と云ふは桑の葉は桑の葉
 と入て種小の種小物と種
 桑葉と云ふは桑の葉は桑の葉
 かして種く種小桑を
 かして種く種小桑を
 桑一昨日斗しては桑



比時紅初小生也一皆引紅極幼小ほほしく生也一と程佳妙一此是小皮
 糞を入り一其年十月以後三尺斗小成長まへ一又予く生か或は根
 の皮赤と此物と無葉なり一一段年く生え根の色白れ葉是とて
 魯葉と名づる一右の上葉苗を翌年春の妻彼岸の以小地より六寸上と
 切て上田小程佳極芽生時を株小若芽を本苑育れ之一一段く成長
 させ小地より一苗の葉射の取より若芽多く物も是と名く爾とありて
 真を本苑育れ一又冬にまきく少れ此はと葉の新葉と名く
 あつ是と名入るく取去べ一幼なれを葉痛むものなり
 葉樹を此と名ある事
 世小日本二葉本八葉とあり葉を日本の一ありて名本より葉を
 此と名入るを葉と名此上或は細葉下て耕作もなりづれ去地小裁て

生立本より又川端水を採小極く
 川際中いともなり土地を砂地又
 去去地より一あるものごとく去小
 裁まだけこれ間小成長
 子一葉蚕の紀事と
 葉一園くを或は荒
 地荒野を辟き川縁
 山奥小く玉玉若辟地
 中いとも蚕紙を以てす
 莫左の利源を以てす
 尚書大傳云天子諸侯



葉樹栽る園

為小向け是まで育し一程小橋へ一日度と一橋は小舟に入る中より小
 舟へ又取接或はながけ入接などくつゝ多々此接指あり今橋別山がと云
 所小流木と接又と所一本の上よりりて業と云又園くも上より教多あり
 乃れ其人不居く学ぶた

妻八十八歳前後蚕糸の時分大おろし素仕芽つと枯く申回あり
 其時日陰の所より根とお解素仕枯氣の之後より時分初日を信るお
 素の芽強く痛まぬ又日陰の所よりと枯氣の海よりうち小初日照射
 多小おおるお芽由だるく痛む其時より初より初素に教くお
 おろしを痛くしせし又素の根と深く掘て下糞を垂れ入るはよ
 ゆる時より痛し一素は十八時目小芽と出し其年此蚕小用立廢し
 去りしお素と蚕小毒なりともいふ



取本する圖

素取本仕根の事

素の取本仕根分能素と見立接申
 三年目後小打つと素小初り晴天の時
 地より素根上切登し切株より若
 芽多く出る是小初り糞を垂れ
 翌年の素根枝と七寸程宛間を垂れ
 若芽を中づつし其株を欠きたり
 彼根の素付れ下根か一年爪あて皮を
 ひきぬを付紗したる若芽と皆上小
 立押付て園のて深く埋免踏
 付て地と堅く志免垂へ其年此

十月以来七虫を付く埋一為芽の所より根を多く知はる又病を
 付は其根埋ふ時根を知り申運一是取本此終半之明年の去根
 と塹上ヶ種本のどくを中つて小切難一介小極之是下葉杯
 追く入をだく一是枝を水少く八九分ふとぬは方なり

桑此虫送り并葉の病を除ふ事

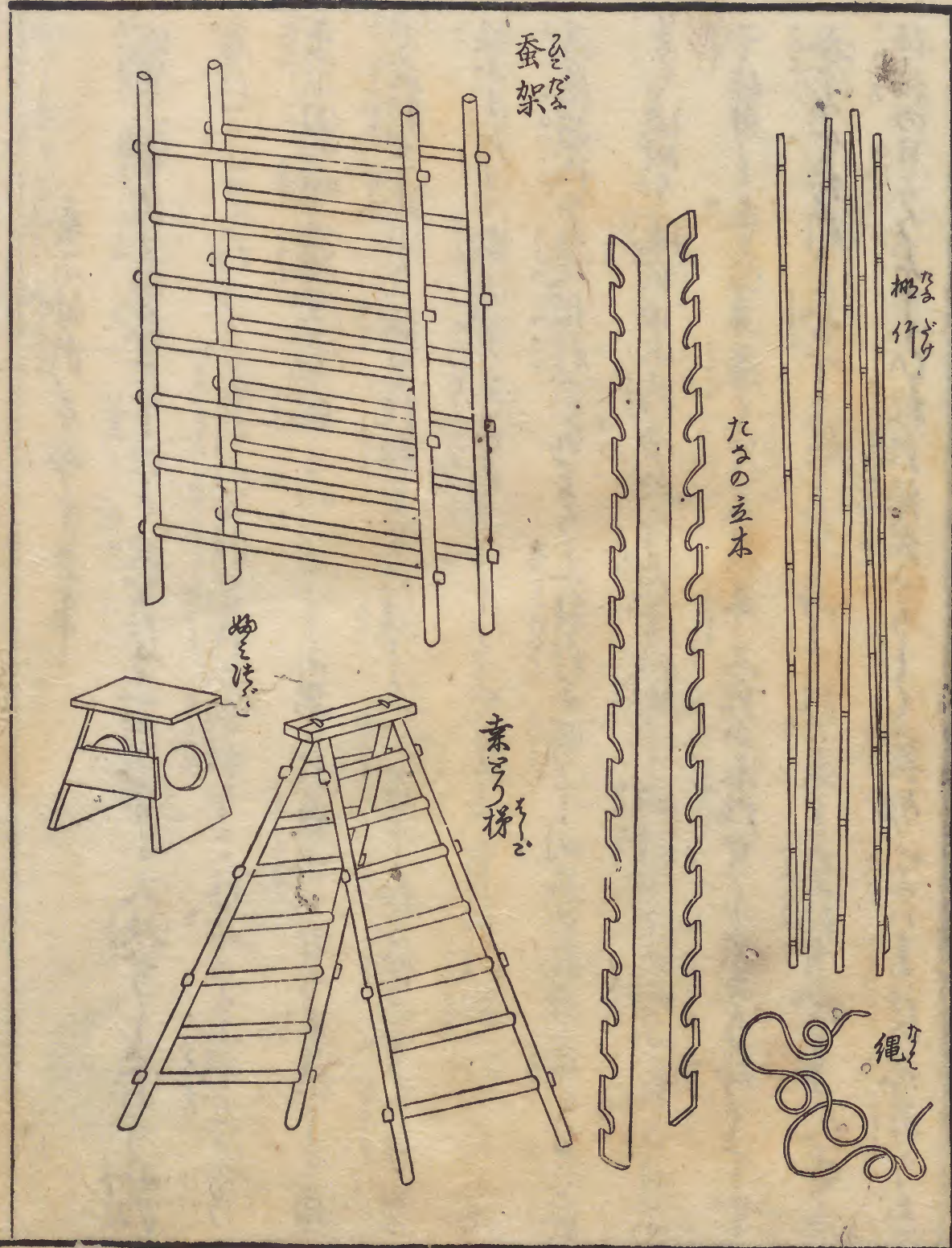
去小即葉茂る時葉に赤色なる病はく申ありは病國々少て異名
 あり中國ありいせとらふは病はく少く梓をそのく抄ひて一
 其儘まだ及程多かり番小大毒なり又葉志々みせつ小白虫ぬ
 出来葉の葉痛む事あり是も右のどく掛取べ一懸てかこの也と
 病はく去地小と桑根小煤の粒感と蓄麦売等此灰汁等ありとの
 桑は病少く一とりの去蚕幼畑の時分桑は本に尺とり虫とり小虫多



虫おろし此半と日中紀不
 大已貴命少名命や
 カとあせ天下成産
 病とおろし方と
 実の者秋昆虫
 の災異と攘ん
 た多小其枝不
 厭法成定む
 あれと神代
 よりのまじ風
 うま
 又とぬこの
 三夏の日記
 おろしをせ見へ
 くれを異國
 のま
 や



われて素の芽と喰ひ枯本れどくなら半有りは時出送り紙すふ
 團くゆくあてこれあり中国色は蚕神不紗又と産去種へ指なぐ
 葉入取あひる葉馬など焼けて是ふ素のひり紙少し取家世征を載或ハ
 標貝笛ふせ吹え子信素ア大勢集り蕭北虫と送る仲のうえはあぐ
 也離子立素北色瓜白り川あり方へ送り物此是とひりおろるとふ又素の
 本にさ先とふ病出来本の皮は葉をふたり柄くこあり是を取天虫
 葉竹の焼く或は焼く庭のれゆく塵と捨べー
 養蠶法道具此中
 養蠶法道具と圖のでくくして巻くこれ内不羽をふく又繭作
 を時ふけりふ葉の乾葉藪ふつりまで前方不用ふくして曝氣るは紙
 乾燥しをる



美良上廿三

蚕小使のきき事

或里小蚕代上小蚕を下に火とたき一時の男小大換せし人あり公は
 登れりよりむう去所の百姓苗代小種をせし居る小朋友あり
 平小田の畦小腰をけ体と居りしと思ひ長瀬未たり置後中居
 て立別とまより種をせし居りし小種をせし居りし苗の芽立能く
 故小まされし種を芽立甚悪うりしとや是を二月の以種種瓜小漬
 其後苗代を種被種瓜あり上種種小啼し時右の種種甚く芽を出
 きては時を遠居田小為種を若芽此出し種種を田の畦小並に日小
 干法けし居若芽甚くつて其年之は小不作せしとありしゆりてや
 蚕と生何のく食する中力れを少し此小を養育せし未之蚕を
 掃初の日よりそとひ親縁若うりとも養育するの法は津島がふ

美良上九三

とを平小の並にせし
 手扱を九根丈切小扱ふ
 為し終日六十日斗
 の法をあらねば是を
 養ひて育めし礼記
 月令云林小婦女母親者
 婦使以勸蠶事と云
 法もは公なり物不五
 なるもの一節小あり
 あひまは長影小時を
 種一織小ありし



時
 角丈作
 正秀

素瓜取小走里ありひる素の扱へかど蘇末にー又と素のわてぐひ小ひりなど
あつたかろ小猪畧の畑方して不刈りねを幸北より我運の悉くは採り
心ゆると散小虫の取りく作の半の蚕のふも取るべし終くは終る事之
神蚕種曰蚕小嵐の用をとき幸 附 蒸と湯ぐ幸

蚕種を至て嵐の好相なり嵐れ通ぬるは所へはり並る一六七月より
その今ぞと別して風小嵐の種一所ふよりてを二十日種を新小約
風小はき圃も何り家北内小嵐多く幸はかひ道小あんあや玉とす
はあまは嵐末はとらふ又夏の日はそ瓜多く紙小色と是と嵐のわら
所小並の恐れく本はとらふ又山小むら北本とらふ素に針の有る本何り
是も所小よりて 是と道小並もより一あかひのでく一ても止ぬ付と嵐末
本の遠有べし 是と道小並と食る小宛並べし
通小所の隅く小嵐の好相と食る小宛並べし

養食上ノ九四

齊民要術云

冬十二月嵐の尾と切生むく明年二月元朝日の出る素小其家
主彼嵐の尾と切て 附 勅屋吏制断嵐蟲 け兜文を唱て家内と
白れを嵐末はとらふ 三時切を嵐殺て
あつたかろ小猪畧の畑方して不刈りねを幸北より我運の悉くは採り

淮南萬畢術云

狐の支眼を狸の陰囊せすり合て嵐此穴とふさげハ嵐外へり
あつたかろ小猪畧の畑方して不刈りねを幸北より我運の悉くは採り

蚕小毒忌何幸

身一たむこのお産の糞はさたる素山椒の匂ひ油氣培氣涼の本胡桃の本
松の本北近所小ある素牛馬の糞付る素うまを焼半一熱して煮さ
臭ひの物焼べし成る門前などを煮さ臭ひの魚肉又ハ糞かどおむい

あざ戸と穿べー又番不浄まけとく赤ふり又い身赤くなり或も
俄ふらけて死する半有は時とあざ桃の糸と火小物とてよりや又
甲は色はあざの糸と掃ひけしをりと知し一か一糸にひて喰さとも
よ又極との酒と糸に喰ひ喰を圓もあり宜しは不浄ふべー

又云番切とあざ此時長廿式半横を半此虫多く出来番と喰ひ殺そ
半あり 是と羽虫とも又け虫多くわく時と川魚又と海魚の糞をどと葉
の苞ふ入番の傍よりこれ新ふけり魚一被思ひ一臭さ匂ひ小集り
苞へたうふなり其時棘小苞と取をれ形を番小持り虫と掃ひ又えの
折へけり虫葉皮も取べー元来けけりを元来年少少く暖氣
年ふ多し一是と番此尻がたど手抜あねを多くなり例年番物
前小家用を能く掃除さべーけ虫掃の下杯のあざよりけけり

養生上九五

番家作仕松の半 附 屋敷番此半

家作の身一暑湿を除ふ松ふ多く根びー空小風抜の元又と窓多く
東面小に戸と明屋一南と少れ窓をあけ何事も戸の穿自由小を
庭一日の照りあむと甚熱一元来秋分四方此陽氣強く朝入り
過まてると極涼一さりのより豆丸つ前より暖ふなり八つ時分より
蒸くせぬめくなりあけ乃家などは別一夕日の火氣小番と
つと先ちひ小換する半回くある半よりけ家後とあれ方樹本と極
て夕日の火氣をふせく庭一又窓をたて番小屏風など引糸一又
と紙帳と入り杯一格別風の入を止先むさくせほめうれり
陽事と豆萩時くあく磐石なり種を家内何時も日換ありく番
番とべー一惣トて番小限れば其道瓜葉とするふと一ふのこ

肝要有り表と苗代風空りて時ふより小風吹別して寒れ事
 折くありて一蚕も幼さ時を重さ痛むべし又ほりれ一神蚕ハ
 庭起より性悪く夜庭一又寒さ小痛むる程のほりれ蚕も後
 々病とありて一我一家に陽氣加減と云ふ事起て大切の事也

養蠶秘録上之巻

養蠶上之巻六

